幼児の自己を支えるには

藤崎　眞知代

はじめに

まず、筆者が居合わせた年長児の一つのエピソードを紹介しよう。

園庭の花壇の苺が色づいてきた。年長になってやっと動きだしてきたA子が保育者に小さな声で「苺、取ってもいい？」と尋ねる。「一つだけね」と言われると、嬉しそうに花壇に走って行った。それからしばらくして、身体を左右にゆったり揺すりながらニコニコして歩いてくるA子に「美味しかった？」と声をかけると、「うん」とうなずく。

この様子を見ていたB子は勢いよく保育者のところに走って行き「私も苺を取っていい？」と聞く。保育者の「一つね」という言葉に、くるりと向きを変え花壇に突進する。花壇ではA男も同じように食べごろの粒を捜していた。じきにA男は気に入った

粒を見つけ、保育者に言われたように洗って食べる。一方、B子は苺棚を覗きこむがなかなか気に入った粒が見つからない。奥の方にやっと見つけ取ろうとすると、無理な姿勢で転んでしまう。近くにいた筆者に、「あれ、取って！」と言う。そこで取って渡すと、すぐに口に入れてしまう。その素早さに驚きながらも「美味しかった？」と聞くと、「すっぱーい！」とにらみつけるようにして言う。その時、傍らにいたA男は「僕のは甘かったよ！」と声をはずませ、けげんそうにB子の方を見ていた。

B子の苺は本当にすっぱかったのかも知れない。しかし、園庭の花壇で熟した苺を取って食べることを楽しく経験できたA子とA男に対して、B子の言葉には日頃の心の屈折を読み取る思いがした。

一、「こだわり」をもつ意味

メイ・R[1]は、人間の実存の仕方には、まわりの世界、共にある世界、そして独自の世界の三つの様態があり、人はこの三つの世界に同時に生きているという。

独自の世界とは日常的にいえば、「私にとって…」ということになるだろう。だから、子どもの「だって私は、…のつもりだったのに…」とか、「どうしても僕は、…したいのに…」といった表現には、それぞれの子どもの独自の世界内存在を含んでいる。それはまた、その子なりの「こだわり」ともいえる。前述のエピソードで示したように、同じ行為でも経験される内容が異なるのはそのためでもある。

独自の世界は人とかかわる際の基盤ともなる。「こだわり」をもちつつ、「こだわり」からも自由になれるしなやかさがなければ人との関係がギクシャクしてしまう。そして共にある世界では、二人

が変化することによって出会いが生まれる。それは親子、保育者と子ども、子ども同士の関係のいずれにもいえることである。

こうした独自の世界の内容、例えば何に興味がありやりたいのか、誰と一緒だと自分も仲間も楽しいのか、逆に、何には興味がなく、できればやりたくないと思っているのかなど、自分のことを子どもはどの程度気づいているのだろうか。こうした幼児の自分自身についての捉えに関して、最近筆者が行ってきている研究を紹介しながら、保育とのかかわりを考えてみたい。

二、幼児なりに知っている自分

一人ひとりの子どもと面接し、二人の子の姿が描かれた図版を見せて、「〜ちゃんは、どっちの子に似てるかな」と尋ね、幼児の自己イメージを探ってみた。例えば、走るのが速い子とそれほどでもない子、遊ぶ友だちがたくさんいる子とそれほどでもない子、などである。

年少から年中、年長になるにつれて、自分の能力や人との関係についての自己評価は下がっていく。だが、いずれの年齢においても両親や保育者の評価と比べると、子どもの自己評価は高く、自分について自己中心的に楽観的に捉えている。ところが唯一の例外として、年中児と年長児では、親が考えているほど子どもは母親に受け入れられているとは思っていなかった（藤崎・高田[2]）。

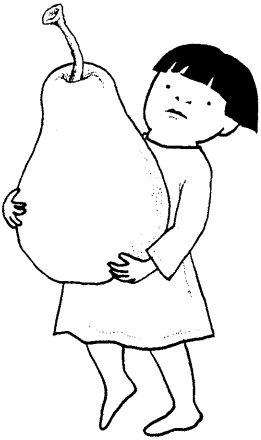
また、大人と仲間では捉え方も違うだろう。年長児についてのみ、「クラスの友だちで走るのが速い女の子（男の子）は誰かな」といったことを尋ね検討してみた。仲間や母親との関係がうまくいっていると思っている子は、他の子から運動は上手だし、色々なことができていると見られていた。つまり、人との関係がコアになって、初めて一人ひとりの仲

間の個性に気づき理解し認めることができるようになっていくと見られる。さらに、何に関心があるかは、日頃の何気ない行動にも現れる。例えば、知的なことに固執している子は、仲間からあまり受け入れてもらえず、人のことを気にしている子は、実際に仲間とうまくいっていないらしい。こうしてみると、幼児は、その年齢なりに自分のことだけでなく、仲間のこともよく見ていることが分かる。

では、子どもは何を手がかりにして自分を知っていくのだろう。シェーネマン[3](Schoeneman.T.)らは、自分で自分を観察して気づく、他の人にいわれて気づく、他の人と比べて気づくという三つの手がかりを上げている。そして、幼児でも自分自身をよく観察することを示しているが、筆者の資料からも、幼児は自己観察を自分を知る手がかりとして最も用いていると推察された(藤崎[4])。

三、自分の内と外の姿

子どもも大人も、誰でも心がはずむ楽しい日もあれば、何か面白くなく気が晴れない日もある。登園してくる子どもの表情や、「おはようございます」の声にも、そうした気持ちが伝わってくる。



日々の保育場面において外に表される行動から、一人ひとりの子どもの内にある自己の様態を探るために、自由に遊んでいる場面の行動を一人について約一〇分間のVTRに撮影した。そして、まず、何をしているのかをエピソード別に分類し、それぞれのエピソードではどのように活動に取り組んでいるか、仲間や保育者に対してどのように働きかけ、応答しているか、また、自慢や批判をどの程度しているか、などについて分析した（藤崎[5]）。

その結果、いずれの年齢でも、自慢したり、仲間を批判したりすることは男児に多く、しかも、自慢する子どもは、仲間にあまり受け入れられていなかった。特に年長では男女児とも自分に自信のない子にこうした行動が多かった。また、年中・年長では穏やかに仲間とやり取りするようになってくるが、そうした子どもは、自分は堅実で安定していると捉えているようだ。

さらに、保育者とのやり取りを見ると、年少児では人との関係だけでなく自分に自信のもてない子が保育者を求めていくのに対して、年長児では人との関係がギクシャクしている子が、そのことを意識して保育者に働きかけていく姿が浮かび上がってくる。このように、子どもが示す自分の内と外の姿には重なる部分が多い。それだけに、その子が示すサインを見逃さずにキャッチし、応えてくれる人の存在は、子どものその後の自己のありように大きな影響を及ぼすことになる。

四、親の姿のインパクト

子どもは色々な人と関係を幾重にもつなぎ、その関係の中で様々な体験をし、個性ある存在へと育っていく。中でも親は子どもにとって影響力の大きな存在である。

例えば、子どもの性別から親がどのようなことを

期待するかには親の価値観が含まれ、それにそっていわゆる「しつけ」がなされる。女児は男児に比べて自分を抑える傾向が強い。それは自己主張よりも自己抑制を女児に期待するしつけが一つの要因となっている（柏木[6]）。

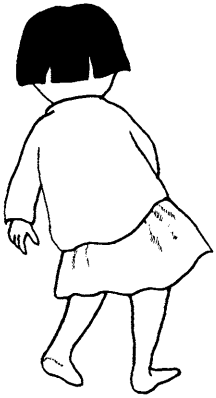
子どもの立場から「しつけ」を捉えると、自分を見失わずに、相手の要求を受け入れると同時に、自分の要求も相手に認めてもらうにはどうしたらよいかを、自分自身で探っていくプロセスといえる。

「女の子だから」と伝統的な玩具を与えられている女児では、知的な面でなかなか自信がもてない。「男の子だから男らしく」という親の願いが強い男児では、母親に受け入れられていないと思ってしまう（藤崎[7]）。つまり、親の伝統的な性役割観が前面に押し出されてしまうと、子どもは自分が本当にありたい姿との間で葛藤する。逆に、母親が自分の経験から伝統的な女性らしさを嫌い、ベタベタすることを好まないにも拘らず、子どもに求められ、母親自身が葛藤することもある。

自分を見つめ性別を越えて個性的なあり方を追求するのは、人としての本来的な営みであり、子どもも大人も常にそのプロセスにある。そして、親子それぞれが今の自分をどのように捉えているかは、日々の生活態度や親子のやり取りにも反映するが、この自分についての捉え方は親子で関連するのだろうか。年長児について検討してみると、母親より父親からの影響を、女児より男児が多く受けていた。特に父親が仕事や家事に自信をもっていると、男児はそれを受けて知的な面で自信があるようだ。父親の影響は女児でも見られ、限られた触れ合いでも父親のインパクトは大きく、親自身が生き生きと自信をもって生活していることがいかに大切であるかを示している（藤崎[4]）。

五、日常保育の中で

保育を参加観察しながら、日頃、漠然と感じていたクラスの印象が、子どもと話して「そういうことだったのか」と、分かってくることがある。例えば、ある園でのことである。年中からもち上がった年長の一クラスは、六月になっても遊びが持続せず、子ども同士のやり取りにも穏やかさ、つながりがあまり感じられない。しかし、もう一つのクラスでは、男女児ともそれぞれの遊びを穏やかに展開しており、子ども同士や保育者とのつながりが伝わってくる。こうしたクラスの違いを感じながら一人ひとりの子どもと話してみた。すると、前者のクラスの子どもは、仲間のことを尋ねても、「知らない」「分かんない」という答えが返ってくるだけでなく、異性や特定の仲間と反発しあっている様子も窺える。一方、後者のクラスの子どもは、ネガティブな感情を表現することはあっても、仲間のよい点も認め合うことができている。これが二クラスの印象の違いだったのかと納得しながら、日常保育の様子に思いを巡らすと、それは「子どもに任せること」への保育者の姿勢の違いに思われた。



また別のある自由保育の幼稚園に伺った時のことである。広い園庭と園舎を子どもは自由に自分の好きな場所でそれぞれに遊んでいる。しかし、人とのつながりが物理的空間の大きさに負けているという印象を残念ながら受けた。そして一日の保育が終わり、クラスの子どもたちが降園していく中で、二～三人の子が保育者とお弁当を広げて食べ始めた。

「一人ひとりの子どもを知るために、こうやって少人数での触れ合いの機会をもっています」という説明に、何か釈然としなかった。その日の保育から人とのつながりが感じられていたならば、この説明の受け止め方も違っていただろう。

日常保育の中で子どもが自分に対して自信をもてるようになるのは、まず子ども自身が自分と向き合わなくてはならない。そのためには、一日の過ごし方から自分で模索し、やりたいことを実現していくための努力を一歩一歩自分で歩むことが基本となる。そのプロセスで保育者から仲間にも目が向き、人との関係の中に自分を位置づける。そして、そうした自分の姿を安心して受け入れられることが自信につながっていくと思われる。

それには、保育者は一人ひとりの子どものありのままの姿を受け止め、支えながら、その子の秘められた個性を見抜き、その子のよいところを気づかせてあげることが大事である。日常と異なる活動や園行事を取り入れると、いつもと違った子どもの面に保育者だけでなく仲間も気づくことはある。そして、何かやれば保育者も楽しく、やったということに満足感を抱きやすい。だが、そうした活動や園行事では、どうしても全体の流れが優先され、一人ひとりの子どもとのやり取りの細部は見落としてしまうことも少なくない。子どもに任せることを基本としながら、どんなに広い園庭、園舎であろうとも、日常保育の中で、一人ひとりの子どもの内と外の姿

を捉えてこそ、自由保育の意味があると考える。

六、時代の親子への働きかけ

一九八〇年代の親は新しい価値観の社会に生まれ育ち、社会への適応にあまり苦労しなかった世代といわれる。それだけに、自分の裁量で物事を取りしきろうとする傾向があり、子育てについても親自身が子どもの人生をよくも悪くもできると考えてしまいがちである（エルキンド[8]）。

このような親世代のあり方は、少子化の傾向と相まって、一人ないしは二人の子育てを確実に成功させるために早くから競争力を身につけさせようという親へのプレッシャーとなっている。学業成績に直接結びつかない「しつけ」に、無関心な親が多いことの一因でもある。子どもはそうした親の期待を敏感に感じ取り、親の価値基準にそったことには意味を見いだすが、そうでないことには自分から取り組もうとしないところがある。例えば、片づけの時など、そうした子どもの一面がよく見えてくる。幼児なりに色々なことができるようになることは、子どもにとっても喜びである。そのことが子どもの生活の中で体験されるように、また、そうした体験を通して子どもが自分自身に自信をもてるように支え、援助することが今日の保育に求められる。

終わりに

年長の二学期ともなれば、就学時健診などで子どもは学校を意識しだす。ごっこ遊びから、幼稚園年長児が抱く学校のイメージは、勉強の時間と休み時間がある、教科書がある、宿題がある、先生が幼稚園ほど優しくない、などである。幼稚園との違いが学校の特徴として強く映るのだろう。未経験ゆえに不安でもあるし、期待したりもする。親だけでなく、子どもも遊びの中で学校を先取りしている印象

を受ける。それだけに、今の生活を充実させ、幼児なりに独自の世界をもった存在として就学を迎えることの大切さを思う。

（群馬大学）

引用文献

(1)メイ・R　一九八六　伊東博・伊東順子（訳）『存在の発見』誠信書房

(2)藤崎眞知代・高田利武　一九九〇「子どもの自己形成に及ぼす社会的比較の影響―（一）幼児の面接資料の分析」日本心理学会第四一回大会発表論文集　P・50

(3)Schoeneman.T.,Tabor.L.,Nash.D.1984"Children's report of the sources of selfknowledge."Journal of personality, P.52, P.125-137.

(4)藤崎眞知代　一九九四「幼児の自己を支え育む保育」（未発表資料）

(5)藤崎眞知代　一九九四「幼児期から児童期におけるコンピテンスの発達―（三）保育場面における行動の年齢変化」日本教育心理学会第三六回総会論文集　P・20

(6)柏木恵子　一九八八『幼児期における「自己」の発達―行動の自己制御機能を中心に』東京大学出版会

(7)藤崎眞知代　一九九一「子どものコンピテンスと行動スタイル―①遊び場面での玩具との関連」日本保育学会第四四回大会研究論文集　P・348～349

(8)エルキンド・D　一九九一　幾島幸子（訳）『ミスエデュケーション―子どもをむしばむ早期教育』大日本図書